

科学技術の潮流

JST 研究開発戦略センター

100

科学技術政策関係者の間で各国の事例を集めた学び合いが始まっている。

動向を俯瞰

政策側にもイノベーションが求められる。昨今、エビデンス・ベ

と研究現場の対話がますます重要になる。望ましい社会作りには、これまでの知見を自在に活用しながら、これまで以上に確立された新たな動きは、従来の科学的な価値を追求する研究や産学連携による研究開発を否定するものではない。研究開

2020年の科学技術基本法の改正後初となる第6期科学技術・イノベーション基本計画が策定された。同計画が科学技術の創出・活用と社会変革を同時に進める方向性を打ち出したことは注目される。

望ましい社会作りに向けて、問題の設定から研究開発、成果の実行動にも影響を及ぼすので、成果の使われ方も研究して社会システム側の備えを進める必要がある。一般市民も、種々の施策を運動させ、効果を見ながら柔軟に運用するアジャイルな企業にとっても共有価値の創造(CSV)の

発動向の俯瞰的な把握がますます重要になる。こうした知見を自在に活用しながら、これまで以上に確立された新たな動きは、従来の科学的な価値を追求する研究や産学連携による研究開発を否定するものではない。研究開

価値産み出す

「総合知」創出で社会変革

そうした取り組みはすでに始まっている。「戦略的イノベーション創造プログラム(SIP)」による自動走行プロジェクトなどは好例だろう。科学技術が産み出す社会的な価値も考慮して、誰がどう使うのか、ルールは



科学技術振興機構(JST) 研究開発戦略センター 副センター長

倉持 隆雄

東京大学大学院理学系研究科修士課程修了。旧科学技術庁(現文部科学省)に入庁して科学技術行政に従事。文科省研究振興局長、内閣府政策統括官(科学技術・イノベーション担当)などを経て15年より現職。

